

資料紹介 『園のはな』

小林 勇

随分以前のことになるが、本誌第28号（平成五年十二月発行）に資料紹介として、『（祇園新地 娼婦名譜）園の夜桜』を影印（一部翻刻を加える）して掲載した。その際該書について、「本書の序文によればこれより先に「園花」と題する芸妓の名寄があったことになる。これも今日では伝存未詳であるが、幸い『守貞漫稿』中に「天保十年亥極月刊行園の花と云書に」として一部の透き写しとともに紹介されており、その実在を確認出来るとともに概要が知られる」と述べた。（注1）その刊本を見ることを得たので、前者に引き続きここに紹介しようと思う。但し前者には「花の枝折」と題する詳細な価付が附載されており、そこに花街資料としての価値を認めての紹介であったが、本書は純然たる名録であって、そのような資料的価値には乏しいと言える。しかし本書も『国書総目録』や『古典籍総合目録』に見えない書物ではあり、先に紹介した資料と一对となるべきものである。その点に意義を認められよう。

本書を『園の夜桜』と比較すると、謂わば姉妹版のこととして、書型や表紙の模様など共通する部分が多い。そして前者について注意された点、即ちそれが、『天保佳話』や『風俗三石土』など安穴道人中島棕隠に関係の深い書物の出版で知られる蒙可楼の蔵版である点であるが、果然本書も蒙可楼蔵版であった。のみならず、前者で「編者申」とのみあった凡例に当たる部分の署名が、本書では明瞭に「編者 蒙可楼主人記」とあり、蒙可楼が単に本書

の蔵版者であるだけでなく、編集者でもあることが明らかとなった。多分『園の夜桜』の編者もまた蒙可楼(注2)その人であったと思われる。もっとも、蒙可楼と棕隠との関係は未だ十分に明らかではない。本書の東籬亭主人の序文には、蒙可楼の京都人にして和漢雅俗に「心いたらぬ隈なき」ことが述べられ、棕隠に相応しいのであるが、それ以上には判然としない。この序文中「蒙可楼のあるしよから(良)大和の」とある部分が、(銅駝)余霞楼を掠めていると思われるのはこじつけに過ぎようか。ともあれこの、棕隠との深い関係が想像される書肆の、これ又祇園花街関係の出版物の一つが知られることになるのは確かである。

猶、先に『守貞漫稿』を引用したが、今この刊本と『守貞漫稿』の記述とを対応させてみるに、喜田川守貞の述べている本が底本と同じものかどうか疑問がなくもない。それは先ず『漫稿』には「天保十年亥極月刊行」とあるが、本書は内題左に「亥十二月改」とあるものの、刊記は「天保十一年子正月発行」とある（この刊記や広告は『園の夜桜』と同一版本を用いている）。これは内題左の記述に従ったものとも見られようし、又その記述や『園の夜桜』序文から、同一の刊記を持つてはいても本書が先行することは明らかであるから、或いはそれが実際であったかもしれない。しかし『漫稿』に「万屋安兵衛より万屋嘉吉に至り、置屋十三戸(注3)」とする記述は、置屋の戸数は同じであるが、本書では万屋安兵衛から始まって京井筒屋寅之助に終わっている（この順序は『園の夜桜』も同じ。これにより先稿に於いて或いは脱丁かとも推測した京屋喜兵衛店は当時娼妓を抱えておらず、最初から同書には記載されなかったものと思われる）。この点疑問を存するが（もっとも『漫稿』のその前の記述より、この部分は本書掲載の順ではなく、置屋の所在地別に整理したものと考えられなくもない）、今他本を参照するを得ないので、これ以上深入りはしないこととする。

次に簡単に書誌を記しておく。

表紙 白地に藍で収載される置屋の商号を刷り込む。地紙の色を異にするだけで、『園の夜桜』と同一版本による

ものと認められる。七・三纏×一五・七纏。

題簽 左肩。緋色地紙。子持ち枠。一部破損。「園のはな」。残存部約五・〇纏×一・三纏。
見返し 黄色地紙。飾り枠の中に「祇園／新地／歌妓／名譜／園花」。

構成 序半丁、凡例半丁、名寄二十四丁半、広告・刊記一丁。以上、全二十六・五丁。但し名寄せ部分は五丁が重複しており、正しくは二十五・五丁の筈。

柱記 序に「序」。以下はなし。〇のみ。

丁付 序になし。名寄せから刊記にかけて「一」〜「五」「五」(重複)〜「廿三」「廿四了」。「追出目録」にはなし。

匡郭 四周単片。六・一纏×一四・二纏。

備考 序文のみ十六行の野入り。名寄の「二」丁と「三」丁の間に封切紙を存している。

以下、紹介に当たっては、『園の夜桜』同様、序文、凡例、広告・刊記(これは前書と同版であるが)は、上段に影印を掲げ、下段に翻刻を付す。名寄せ部分は影印のみを三段に掲げることとする(「五」丁の重複は勿論省く)。

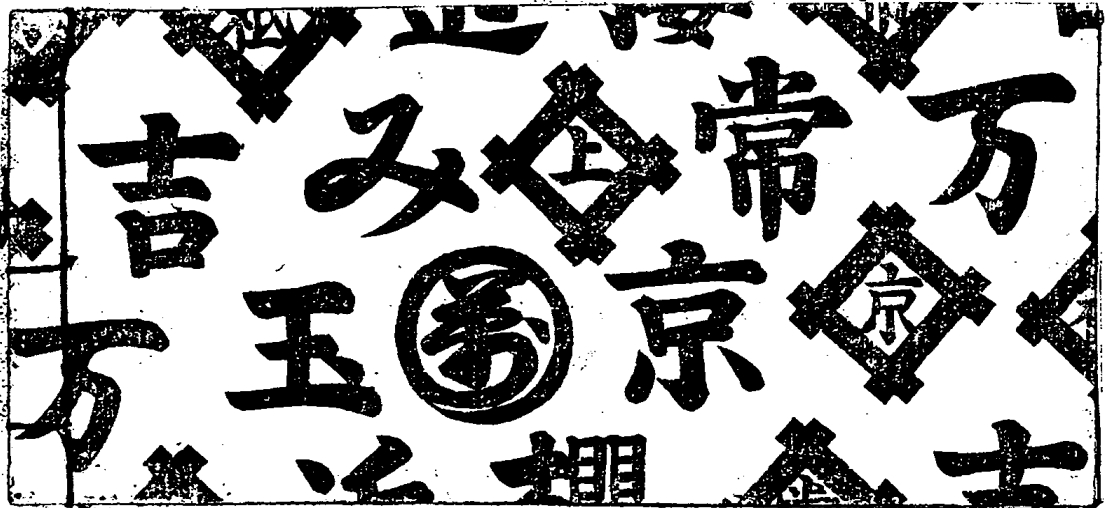
注1 ここに「透き写し」と述べたのは、刊本と対比するを得なかった為の誤りであった。以下の影印と『守貞漫稿』を比較すれば明らかであるが、人名や記載順は一致するものの刊本で「きをん町」とあるところを「きおん町」、「万屋」を「萬屋」とするなど、『漫稿』は余り丁寧なとも言えない書写の仕方をしている。又後述の如く、底本と同一の版本に基づくか否かにも多少の疑問はある。

注2 この人物は、読本等を多作した池田東籬であろうか。『園の夜桜』及び同書附載「花の枝折」の序者「桃李散人(桃李老人)」も音の一致から同一人物であろう。

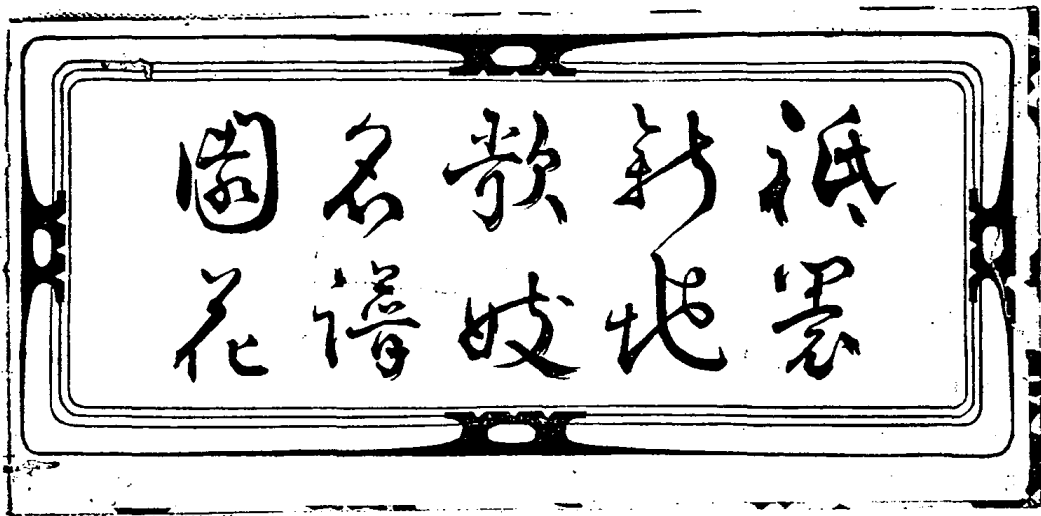
注3 『守貞漫稿』の本文の引用は『合本自筆守貞漫稿』を参照しつつ、岩波文庫本『近世風俗志(三)』によつた。



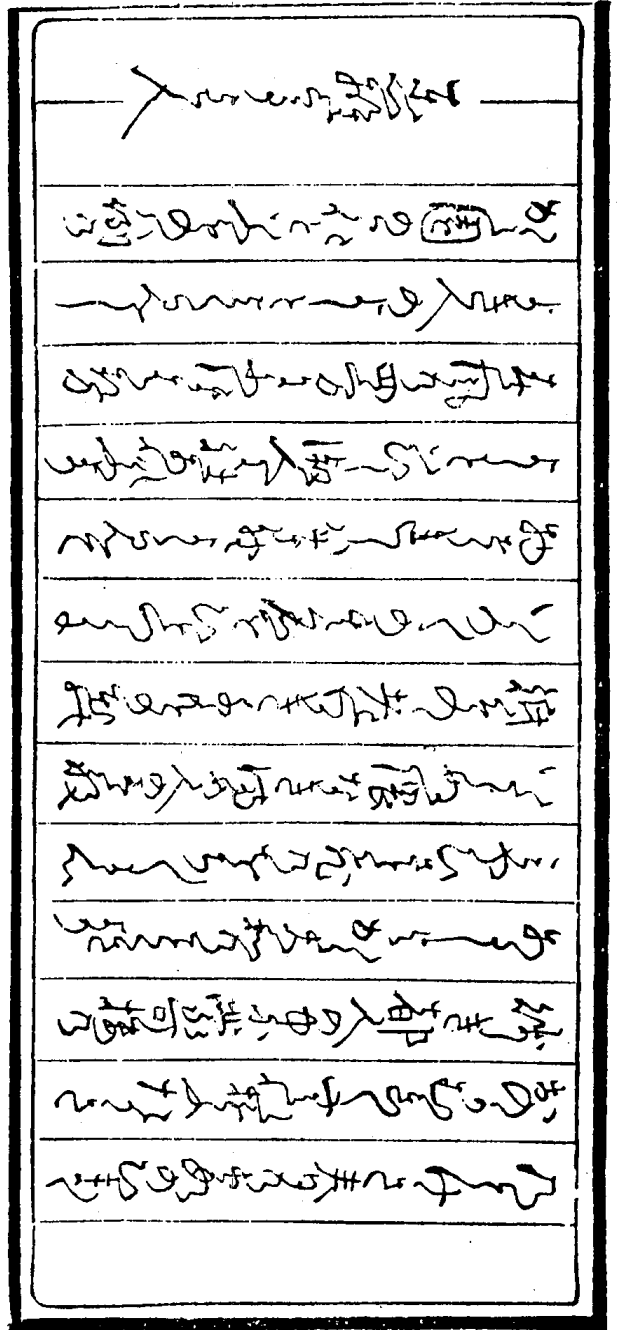
(表表紙)



(裏表紙)



(見返し)



のとけき春の霞のひま／＼

おのかむれ／＼おれ遊ふたかき

賤しき都人の中に蒙可楼の

あるしよから大和のごとくさより

みやひさとひのをち／＼に心

いたらぬ隈なきまめ人の今般

祇その／＼老わかき千もとの花の

いろ／＼の其名をひとつらに

物せられしは芳野よく見て

よしといひし淑人に社あれけふより

春風の四方にははせ

よき人のよしとよく見し

かみ園の花といふものは例の

東籬亭主人

(丁付なしオ・序)

徳川家可憐日記

一 此書はふるくより全盛糸の
 音色あるは歌妓名鑑または
 最中の濤月などいへる書つき
 にありされどわが紙に書つめ
 たらば尽すことかたし故に今はかしこ
 つばらに聞つくらひかく小冊とは
 なせりしかありて此書をもて
 歌妓の甲乙あるは其かすを
 かぞふ便とはならざる也
 此書月毎に改正なすとは
 いへども其真ことに数多なれば
 なほあまりたるも洩したるも
 あらん 希は好士亮本へ
 しらしめたまへ速にあらたむ
 べし且名の文字榮江路沿
 などの違ひたるもあらんそは
 幸ひに見ゆるし給へと
 編者 蒙可憐主人記

(丁付なしウ・凡例)

(二・ウ)

<p>キ</p> <p>久友業小索堂小力里久</p> <p>鶉右治里市業久堂尾業</p>	<p>吉</p> <p>吉右左衛門</p>	<p>キ</p> <p>小 小</p> <p>と と</p> <p>く 然</p>
--	-----------------------	---

(三・オ)

<p>房政英房辰徳色</p> <p>鶉治浦尾業業業</p>	<p>吉</p> <p>吉右左衛門</p>	<p>里里鶉歌梅</p> <p>系考業業膏</p>
-------------------------------	-----------------------	---------------------------

(三・ウ)

<p>櫻</p> <p>櫻井左衛門</p> <p>淑 雅</p> <p>き 路</p>	<p>キ キ</p> <p>光 と 勢 急 小 小 中 久 小 重</p> <p>吉 の 吉 い ろ り 業 尾 際 右</p>
---	--

(五・ウ)

キ キ キ キ キ

むせ君久き小然号飛公久種常小奇雲雲小君弱
 免う代君雲友雲通雲業鴉雲雲業雲吉葉の雲尾

(六・オ)

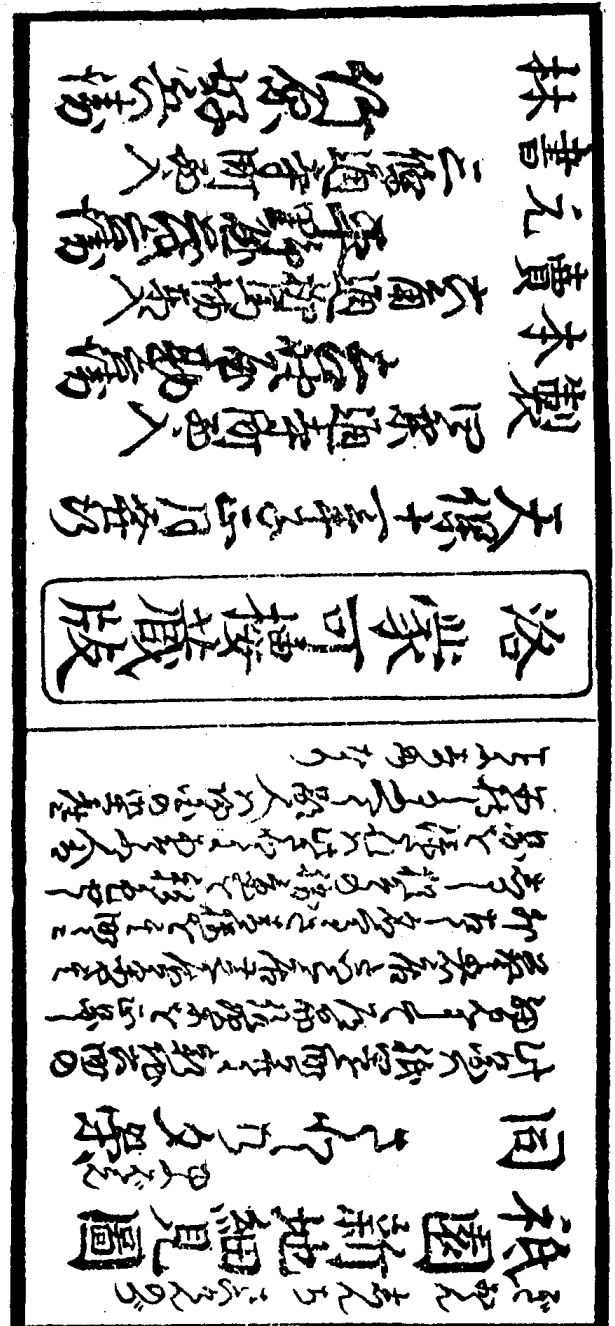
キ キ キ キ

雷翁小光波小梅梅い八種辰花八家菊小突う子
 つつ二江ふ高業と鴉勇業雲活かくい雲江業

(六・ウ)

キ キ

政と八世ま奇や校君奇梅小急己友み菊政修少
 やの赤木のの業尾吉く業二枝たま業と業二雲く



林 竹原好兵衛
 書 三条通寺町西へ入
 元 平野屋茂兵衛
 壳 六角通柳馬場東へ入
 本 吉野屋勘兵衛
 製 四条通寺町西へ入
 天保十一年子正月發行

洛 蒙可樓藏版

祇園新地細見圖
 同 ざとの夕榮
 此図は祇園町并に新地六町の
 細見にして道筋路次等を正図し
 芸者店たいこ店芝居茶や其
 外古く名高き青樓を其町々に
 しるし猶その勝景を彩色せし
 図を添たれば此ざとにあそふ人は
 所持し給ふへう鄙人は帰国の御土産に
 ことに奇妙なり

(廿四丁・ウ)

追出目録	
下川原 見 栄 全 近影	是書はさとの夕はえと同しく 勝景を一枚すりにして円山双林寺の 坊舎二軒茶やなんと名高き 所々をしるし町々に舞妓の名 定紋をつはらにするしたる也
新地 園 全	こは遊女茶たて女の名よせに して老若の三品をわかつて 園の花と一つらになすくき書也
西名垣 見 全	花の追風 全
二条新地 見 全	川そひ柳 全
細見 宮川 全	三千世の桃 全
細見 野梅 全	梅の魁 全

いづれも追々上末仕候御評判
よるしく奉希上候 売元白
(丁付なし・オ)

追出目録

近影

下川原 見 真葛の栄

是書はさとの夕はえと同しく

勝景を一枚すりにして円山双林寺の

坊舎二軒茶やなんと名高き

所々をしるし町々に舞妓の名

定紋をつはらにするしたる也

新地 園の夜桜 全

こは遊女茶たて女の名よせに

して老若の三品をわかつて

園の花と一つらになすくき書也

西名垣 見 花の追風 全

二条新地 見 川そひ柳 全

細見 宮川 三千世の桃 全

細見 野梅の魁 全

いづれも追々上末仕候御評判

よるしく奉希上候 売元白

(丁付なし・オ)